

パネル

典」の啓示の言葉にそろえられた。

また、編纂の当初は、当時の『天理教教典』に準じて誕生からの九十年と立教からの五十年の二つの「ひながた」の見方があった。しかし、第五稿以後、「ひながた」の用例は後者に限定された。前者は「ひながた」ではなく、「万人の手本」と位置づけられたが、第十一稿からはこのような表現もとられなくなった。教祖の全人生を広く人々の手本としようと試みられていたものが、立教（信仰）を前提にして厳格に区別された。ただ、「ひながた」にはならなかった立教以前の教祖に対する評価には、近代日本の一般の価値基準に従っているところが顕著だったことにも注意しておきたい。非歴史化は脱日本文化を自覚した結果ではないので、容易に日本に回帰してしまうのである。

「月日のやしろ」（教祖の神格化）と「ひながたの親」（人間化）の両者は、相反する要素を持つ。その矛盾の象徴が、宮池へ身を投げようとした逸話である。「月日のやしろ」を強調する立場からすれば、天理王命と中山みきの主体の分裂は回避しなかったと思われる。しかし、改稿を繰り返しながらも、二面性を統合的に叙述することは難しかった。中山正善も中山みきを人間的に理解する伝統的信仰に従ったことがあり、そこから脱皮を図りつつも、分裂的な記述がわずかに残っていて、伝統的理解を完全に否定できなかった。

多くの場合、中山みきの教えや人生を一貫し完結したものとして把握する。しかし、「こふき」は未完であり、「かんなるだい」「世界たすけ」の実現も同様で、「存命の理」は未完の宣言

である。未完で開かれていたがゆえに、後の人々がみきの救済の物語に参入できたのである。五十年の「ひながた」とみきの現前性（存在証明）の二つに支えられて明治二十年で終わる『稿本』の枠組みそのものが、中山みきの物語を狭めているのかもしれない。

## 教祖像の力学

—— 金光教の教祖探求から ——

竹部 弘

「教祖伝の脱構築」というテーマの下、教祖伝に結果する教祖探求において、様々な動因や相異なる要因から成り立つ教祖像の力学を多面的に考察する。具体的には明治期から昭和期に至る金光教の教祖探求過程を、教団の公的表明と信仰者の内発的希求、根本資料の変遷（伝承資料から教祖による自伝的資料へ）、社会状況・時代精神や学問動向との関わり等、諸動因の相剋・競合・協働関係において検討する。

教祖金光大神在世中には、人々は眼前に接する教祖に充足しており、伝記的な希求は余りなされなかった。教祖没後も直接教祖に接した「直信（じきしん）」と呼ばれる人々は、体感的に把握した教えと記憶で生きていた。その後教団独立時（明治三三年）、教団が公的に表明していたのは「慎誠（しんかい）」「神訓（しんくん）」と呼ばれる教えであり、日柄方位の迷妄

を打破するという、教団による教義宣布のための教祖像であった。これに対して、当時の青年信奉者層から、教祖が教えを説くに至る信仰形成過程解明への欲求が、教祖伝編纂という形で求められた。

こうして伝記的な人物像への関心から探求が進められるが、当時は直信由来の伝承と、そこから派生した伝承に拠る資料的制約があり、当時の時代思潮との関連もあつてか一種の「神話化」された教祖像も描かれた。この状況が一変するのは、教祖の自伝的資料の存在が教団に明かされてからである。明治四十年に始まる教祖伝編纂過程で、直信が伝える立教年代に疑義が生じたが、銚衡の過程で、教祖筆「金光大神御覚書」の写本が提出されたことで決着した。これにより直信伝承以上の信憑性を持つものとして、この自伝的資料が教祖伝の所依になる。以後「覚書」に基づく教祖探求は、日露戦後の教団の社会活動に対して教祖を範とした信心本位の立場へ回帰すべしとの主張を初め、現実の教団体制への批判を伴いつつ進められた。中でも大正期・昭和期を通じて、「立教神伝」（教祖に対し氏子救済を依頼する神の言葉）に拠り、求信的・内面的な信仰を基調とする教祖像が構築され、教義・教団・教師像の範型を生み出していった。

昭和四十年代になって、教団の社会対応の必要性が論議されるようになり、同じ「覚書」でも明治期の記述に見られる文明批判の視点や社会に積極的に立ち向かう姿勢が注目される。これに歴史学の通俗道徳説など学問動向や教内の教学的志向が相俟って、内心倫理的側面の重視から社会救済への使命感に重心

を移した教祖像が求められていく。折柄、もう一つの自伝的資料（「お知らせ事覚帳」）が教団に提出されるが、対社会的な志向を強める教団動向にあつて、新資料が持つ未解明で多様な可能性の中で、布教を志向する世界的視野の強調へと傾斜していく。これは、教団にとって「未知」で「他」なる教祖と出会う機会であったが、その後の経過は總体的には、教祖の当事者性（教祖による教祖認識）と教団にとっての指標として求められる教祖像との間に課題を残すこととなった。

今日まで教祖に関する詳細な経歴が蓄積されてきて、改めて「教祖とは誰か」が問題になる。それは伝記の本来的な主題であり、「教祖が何であるか」（構造内の位置、機能・役割的存在意義）とは異なる問題である。またそれは、かつて直信達が眼前にし体感的に捉えた教祖の存在感に通じるものであり、生本性（救いの基、崇拜の対象）と教祖性（教えの基、信仰の根本）の交差するところ、あるいは教祖以後の人間における教祖探求と、教祖自身（自伝的資料）による教祖認識との間の疎隔と架橋の関係を検討する要がある。

## パネルの主旨とまとめ

幡 鎌 一 弘

日本の民衆宗教（新宗教）が有するいくつかの特徴の中で、教祖の占める位置の大きさはしばしば指摘される。教祖は、根